＜前回＞初期キリスト教の多様性とパウロ

（１）イエスの宗教運動の多様性

１．イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで

２．復活をめぐって

「イエスが一緒にいるのだと。それで、今ここでイエスから力強く神の王国を委ねられているということを説明する手段を見つけようと葛藤したわけです。その手段が、復活物語だったのです。」（クロッサン『イエスとは誰か』新教出版社、159）、「復活とは、「イエスが一緒にいる」という体験に関するいつくもあり得る考え方のたった一つにすぎません」（162）。

３．イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性

単線的な歴史像は後の再構成である。

・エルサレムとガリラヤ

・ヘブライオイとヘレニスタイ

・マック「この初期の時代から、イエスの追従者たちの五つの異なるグループ」

４．キリスト教はいつキリスト教になったのか？　キリスト教とは何か？

イエス／パウロ／パウロ以後

５．キリスト教の成立＝キリスト教起源神話の成立（パウロからルカ文書の間）

古代イスラエルの民族起源神話の改訂＝キリスト教起源神話への統合

古代イスラエルの正統な後継者としてのキリスト教

預言と成就、イスラエル民族から教会へ、旧約（旧い契約）から新約

↓　バートン・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社。

一神教的伝統とイエスの神性の経験

（２）聖書学的観点から

６．多様な弟子集団からパウロ的キリスト教への展開は、歴史的状況に規定されたパウロ以降に起こった事態である。

・ユダヤ的キリスト教、使徒会議(48/49)、ユダヤ戦争(66-70)

・ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。

→　キリスト教のユダヤ教からの離脱

・パウロの異邦人伝道路線の線上における初期キリスト教

７．ペンテコステの意義：ルカ的な「救済史の神学」の内部に位置する（？）

言語の多様性　→　民族の多様性とキリストにおける統一＝世界宗教

（３）パウロ伝承と歴史的パウロ

８．資料

1)使徒言行録：90 年代

2)パウロ書簡:第一テサロニケ、ガラテヤ、フィリピ、フィレモン、第一コリント、第二コリント、ローマ

3)二次的パウロ：第二テサロニケ、コロサイ、エフェソ、牧会書簡（第一第二テモテ、テトス）

９．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市

様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。

30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害

66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

10．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）

↓

地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在

急速な拡大（点から点へ）

11．小アジア南東隅付近の町タルソ出身のユダヤ人。イエスと同じ頃の誕生。没年は 62 あるいは 63 年という説。主たる言語はコイネー・ギリシャ語、都会人、中産階級に属する教育を受ける。天幕作りの職（使徒言行録 18.3）。前半生はパリサイ派（復活を信じる）。パリサイ派のガマリエル一世に師事（使徒言行録 22.3）は伝説・推測。イエスの弟子集団を迫害。しかし、詳細は不明。回心は 33 歳頃→異邦人を回心させるという特別な使命の自覚

12．論争：エルサレム教会とユダヤ的なキリスト教（あるいはユダヤ教イエス派）
　　律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

（４）パウロの意義と新しいパウロ論

パウロ的キリスト教が現代に至るキリスト教の基盤となる。

13．普遍宗教・世界宗教キリスト教への道
　　民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道？

14．西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
　　パウロへの反発・パウロ批判
　　体制的イデオロギーの代表
　　↓
　新しいパウロ解釈：1980 年代以降
　　体制派パウロから戦うパウロへ
　　政治哲学におけるパウロへの注目

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジェク『操り人形と小人』青土社、195）

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ 3:28）

15．パウロ的教会（エクレシア）とは何か。

（６）パウロと政治哲学

16．ローマ帝国のイデオロギー

Focus on the Roman imperial order as the context of Paul's mission, however, is leading to another recognition. Instead of being opposed to Judaism, Paul's gospel of Christ was opposed to the Roman Empire.

17．パウロとユートピア
　被造物全体の救済、ローマ帝国の環境破壊のイデオロギーに抗して

Robert Jewett, The Corruption and Redemption of Creation. Reading Rom 8:18-23 within the Imperial Context.（25-46）

Jacob Taubes　Paul's "political theology" as "a political polemic against the Caesars,"（25）

６．パウロの異邦人伝道

（１）パウロ神学の基本構造

1．核心点
　・キリストの十字架と復活における神の救済の活動
　・神の救済活動の一環としての異邦人伝道　→　自らの異邦人伝道の意義

2．諸論争の文脈に即した議論の展開：使徒としての正統性の弁明

→ いくつかの基本的な原則の存在、しかし首尾一貫した体系化はなされていない。

Rom1.1：

Παῦλος δοῦλος Χριστοῦ Ἰησοῦ, κλητὸς ἀπόστολος ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον θεοῦ,

アガンベン『残りの時　パウロ講義』岩波書店。

・「パウロス・ドゥーロス・クリストゥ・イエースゥ、クレートス・アフォーリスメノス・エイス・エウアンゲリオン・テウ」（１０の言葉）

「パウロ、僕＝奴隷、救世主イエス」

・「救世主イエスの僕として召され、神の福音を告げるために使徒として選び分かたれたパウロ」（cf. 「召されて使徒となった救世主イエスの僕」）

・「サウル」・「大いなる者」（サウロス、王家の名）と「パウロ」・「小さい、取るに足らない」（使徒がメシア的な召命を十全に引き受ける瞬間に与えられるメシア的な渾名。姓ではない）。王家から賤民へ。

・メシア的な僕と定められた瞬間に、奴隷と同様に、名前を失って、たんなる通り名で呼ばれねばならない。使徒である前にまずもって奴隷

・パウロが知っているのは、イエス・キリストという名前の人物ではなく、救世主のイエス、イエスという救世主なのだ。「何千年にもおよぶ習性は、クリストスという言葉を翻訳しないままにしてきたことによって、ついにはパウロのテクストから「メシア」という語を消滅させる結果となってしまった」（26）

「「クリストス」という語のもともとの意味についてのわたしたちの忘却をパウロのテクストに投影しているだけだ」（30）

3．普遍宗教としてのキリスト教：ユダヤ人と異邦人の全体に妥当する救済と真理

1）救済史：旧約聖書の伝統の上に、イエスの宗教運動とその後の弟子集団、その役割を位置づける。

ユダヤ主義の克服とユダヤ人の新しい理解

律法・旧約の位置：預言と成就

→ キリスト教起源神話の成立＝ユダヤ教起源神話の改訂

2）贖罪論：キリストの十字架と復活の意味、キリストとしてのイエス

3）教会論：弟子集団（家の教会）、多様性と統一（キリストの体としての教会）

4．新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）：キリスト教起源神話への寄与。

異邦人の救い → ユダヤ人の救い → 被造物全体の救い

5．救済とは何か

・イエスの十字架（死）と復活への参与 → キリストと共に死にそして生きる

神秘主義的あるいは密儀宗教的。法律的意味はむしろ二次的

・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行

移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

6．救済に参与した人間は何をするか。

・自然な帰結としての倫理的な生活

律法的生は前提ではなく、結果。模範的な市民であり得る。

・キリストの体の一体性（教会）への参与

7．いわゆる信仰義認論：「義の認められる」に止まらず、「義となる」。cf. ルター

ルター的伝統におけるパウロ理解に対して。

8．パウロ神学における義認論の位置づけ

・神秘主義（あるいはキリストとの内的関わりの経験）から信仰義認論へ

Ａ・シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義』→武藤一雄『神学と宗教哲学の間』
（創文社、1961年）
第五章「信仰と神秘主義」

・「「パウロには、神―神秘主義というものは存在せず、キリスト神秘主義があるのみである。人間が神との交わりに入るのは、キリスト神秘主義をとおしてなのである」。そして、このパウロの神秘主義の根本思想は、なによりも、「わたしはキリストにある」（Ich bin in Christo）という定式――ただしシュヴァイツァーによれば、「キリストにある」ということは、より根本的にいって、「キリストと共に死に且つよみがっていること」（ein Gestorben- und Auferstandensein mit Christus）を表現する語であるといわれる――で以て言い表されている、といわれる。」（371）

9. The doctrine of righteoueness by faith is therefore a subsidiary crater, which has formed within the rim of the main crater --- the mystical doctrine of redemption through being-in-Christ.

Carsten Claussen, "Albert Schweitzer's Understanding of Rightepusness by Faith according to Paul's Letter to the Romans," in: Daniel Patte und Cristina Grenholm（eds.）, *Modern Interpretations of Romans. Tracking Their Hermeneutical/Theological Trajectory*, Bloomsbury, 2013, pp.87-107.

＜聖書テキスト＞

「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」（ローマ 15:16）

「16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」（ローマ１）

「6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」（ローマ 6）

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」（２コリント 4:16）

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」（２コリ 5:17）

（２）パウロ的キリスト教

10.「前の時代に活躍したパウロの宣教の成果はどうなったであろうか。確認できるのは、パウロの弟子たちともいうべき後継者たちが、使徒の遺産を継承・発展させていったことである。そのためにまず、パウロの手紙が集められ、編集され、学ばれた。

それが、新たに独立したキリスト教のアイデンティティ確立のためには、最大の策の一つであった。なぜかと言えが、パウロが提示した、律法（トーラー）を超越した救いの教

説が、キリスト教をユダヤ教から分離するのに最適であったためである。そのために、一時代前はマイノリティでしかなかった「跳ね上がり者」で「急進派」のパウロの教えが、七〇年以降、にわかに脚光を浴び始めたのである。律法に従い、割礼を受けてユダヤ人になることを全く必要としない、しかしイスラエルの伝統直伝の救いを確証する教えこそ、皆の望んだイデオロギーだったためである。

しかしこれは、おそらくパウロ自身の意図とは全く異なるものである。彼は決して自らをユダヤ教から切り離そうとはしなかったどころか、自分こそユダヤ教の神の新たな啓示に最も忠実であろうとする者と理解したからである。」（佐藤、151-152）

11.パウロ神学のパウロ以降の展開。コロサイ書、エフェソ書における、宇宙的キリストへ。

「1:13　御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。14　わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。15　御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。16　天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。17　御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。18　また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。19　神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、20　その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」（コロサイ／ 80 年代）

「1:3 わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。4 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。5 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。6 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。7 わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。8 神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、9 秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。10 こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。11　キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。12　それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。13　あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。14　この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。」（エフェソ／ 90 年代）

↓

古代地中海世界・ヘレニズム世界の宗教文化的状況において。

クリスマスの意識化。

キリスト教起源神話の論理と宇宙論

教会暦＝時間の形態化。ここで、キリスト教は生として完成した。

＜概論講義：儀礼とサクラメント＞

キリスト教の信仰に生きる＝質的にリズム化された時間感覚（時間経験）をもって生活すること＝宇宙・歴史全体のリズムと個人的生のリズムの同調、永遠との関わりにおいて生きる生命の時間性

９．「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。三つの相。

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

＜参考文献＞

1. コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、『時の中心――ルカ神学の研究』新教出版社。
2. 佐藤研『聖書時代史　新約篇』岩波書店。
3. 荒井献『イエスとその時代』岩波新書、『イエス・キリスト』講談社。
   『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店。
   『使徒行伝　上中下巻』新教出版社、1977/2014/2016 年。
   『新約聖書の女性観』岩波書店。
4. Ｇ・ボルンカム『パウロ　その生涯と使信』新教出版社（原著 1969 年）。
5. Ｅ・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著 1969 年）。
6. Ｅ・Ｐ・サンダース『パウロ』教文館（原著 1991 年）。
7. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972 年。
8. 佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008 年。
9. 青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　ｲｴｽ･ﾊﾟｳﾛ･その後』新教出版社、2013 年。
10. 土戸清『初期キリスト教とユダヤ教――ヨハネ福音書研究の諸課題』教文館。
11. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972 年。
12. 佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008 年。
13. 清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店。
14. ヤーコプ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店。
15. アラン・バディユ『聖パウロ――普遍主義の基礎』河出書房新社。
16. ジョルジョ・アガンベン『残りの時――パウロ講義』岩波書店。
17. 宮田光雄『国家と宗教』岩波書店。
18. Richard A. Horsley（ed.）, *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.
19. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*（Third Edition）, T & T Clark, 2015（2004）.
20. Dieter Georgi, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.